

## 靈宝館の扉の四天王

持国天と広目天の像が靈宝館の前に飾られている。靈宝館は9世紀末の仁和寺の開創以来この寺に伝えられてきた貴重な美術品や仏像などを収蔵することをその目的のひとつとして建てられた。彩色を施した銅板でつくられたこれらの像は、4つの方位を守護する仏教の守護者、四天王のうちの2人を表している。神像は、その持物によって何の像であるかを特定することができる。持国天は剣を持ち、広目天は筆と巻物を持っている。広目天と持国天は4つの方位のうちの2つの方位、すなわちそれぞれ西と東を受け持っている。実際、これらの像が靈宝館の収蔵品に加わったのは比較的最近のことである。靈宝館には従来、阿弥陀如来（西方浄土の仏陀）、多聞天（北の守護神）、増長天（南の守護神）の像が収められていたが、広目天と持国天はなかった。阿弥陀如来は四天王の4人すべてを脇侍としてつき従えていることが多いので、靈宝館の担当者は四天王のうち欠けていた2つの像の制作を新たに依頼することを決定した。そうして完成した像が現在では靈宝館の入り口に飾られており、これで阿弥陀如来の従者としての四天王がすべて揃うとともに、建物自体を悪の影響から守る役割も果たしている。持国天と広目天の像は、20世紀の前半に日本で活躍した建築家でデザイナーの片岡安の作であると考えられている。